

## 重要文化財「木造十二神将立像」の像内墨書について

図1 重要文化財「木造十二神将立像」7軀 鎌倉時代・13世紀

「子神像」「丑神像」「寅神像」「卯神像」「午神像」「酉神像」「亥神像」

像高 子神：77.4 cm 丑神：75.2 cm 寅神：81.0 cm 卯神：76.7 cm 午神：70.3 cm 酉神：71.5 cm 亥神：73.1 cm

かつて京都・浄瑠璃寺に旧蔵されていた本作は、明治時代に寺を離れ、現在「子神」「丑神」「寅神」「卯神」「午神」「酉神」「亥神」の7軀が当館に、「辰神」「巳神」「未神」「申神」「戌神」の5軀が東京国立博物館に分かれて伝来し、12軀すべてが現存している。

従来、本作は鎌倉時代に活躍した慶派の優品としてよく知られており、制作時期は、『浄瑠璃寺流記事（じょうるりじるきのこと）』という史料によれば、浄瑠璃寺の薬師如来像に御帳を懸けたのが建暦2年（1212）とされることから、薬師如来の眷属であるこれらの十二神将像も同時期の13世紀初頭頃の作であると想定されていた。

また近年、どの像かは不明だが、十二神将像の像内に「上坊別当執筆（かみのぼうべつとうしつびつ）、大仏師運慶」との銘文があったと報道する明治時代の新聞記事（明治35年〔1902〕11月22日付、毎日新聞）が見つかり、本作が慶派の棟梁であった運慶（?～1223）の手によるものかもしれないとわかに注目があつまっている。

当館の7軀は全体に損傷が見られたため、文化庁及び東京都の助成、指導監督を受け、平成25年度から修理事業に着手し、平成25年度に寅・卯神像、平成26年度に午・酉神像、平成27年度に子神像、平成28年度に丑・亥神像を、公益財団法人 美術院（京都国立博物館文化財保存修理所内）において順次修理を行った。

最終年度の平成28年度に修理を行った2軀のうち、亥神像の脚部を取り外して、像内を精査していたところ、頭部背面に「あんでい二ね八月」「あんでい二ね九月／十七<sup>(日)</sup>□」と判読できる墨書が確認された（図2）。「二年」を「二ね」と記すのはやや異例であるが、一応これは安貞2年（1228）のことと考えられ、運慶の没年である貞応2年（1223）の5年後の記と判断できる。

本作は、修理によって運慶作であることがはっきりするような発見が期待されてきたわけだが、その点、今回見つかった銘文は運慶没後のものであった。しかしながら、亥神像が少なくとも安貞2年（1228）頃に制作されたものであることはある程度明らかとなり、学術的に大変意義のある発見であったと考えられる。

また、東京国立博物館蔵の作品などまだ像内調査が行われていない像から今後何らかの墨書銘が見つかる可能性が残されており、本作をめぐるのは運慶の関与を含め、作者や年代に関する更なる考察が進展することと思われる。今回の墨書銘の発見がその一助となることを願い、ここに公表するものである。

図1：重要文化財 「木造十二神将立像」7軀 鎌倉時代・13世紀

(画像左から「子神像」「丑神像」「寅神像」「卯神像」「午神像」「酉神像」「亥神像」)



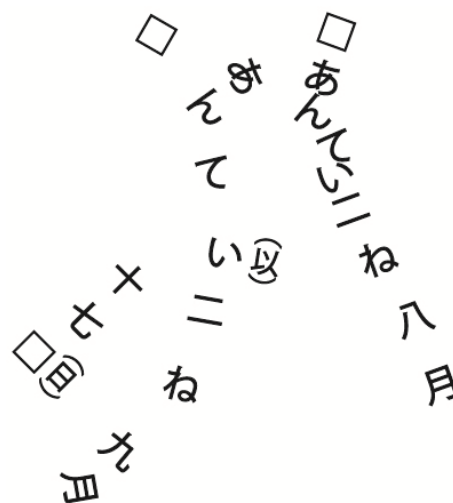
※墨書が発見された「亥神像」(左)と頭部部分(右)

図1 「子神像」「丑神像」「卯神像」「午神像」「酉神像」「亥神像」6軀【撮影：岡田愛（京都国立博物館）】

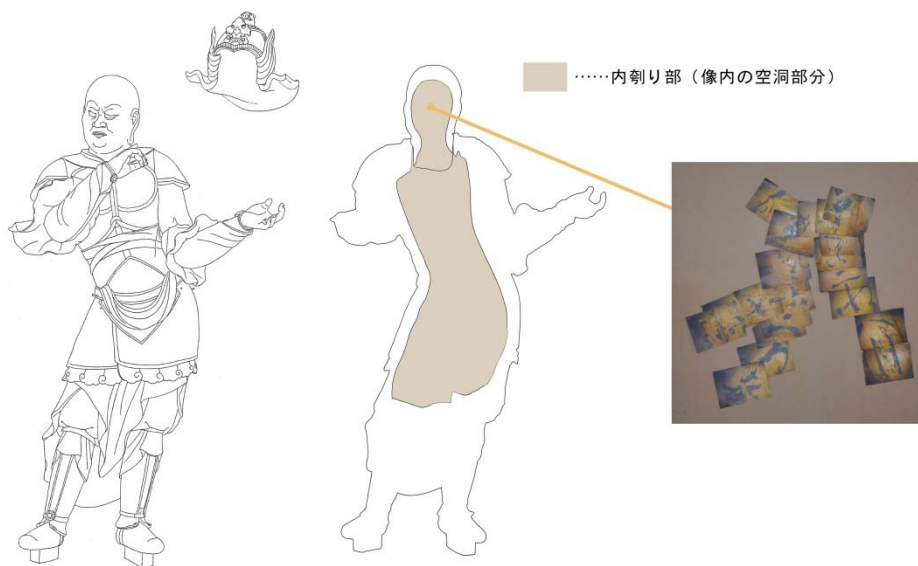
図2 「亥神像」像内頭部に確認された墨書（ファイバースコープ合成画像）とその略図



【撮影・制作：公益財団法人 美術院】

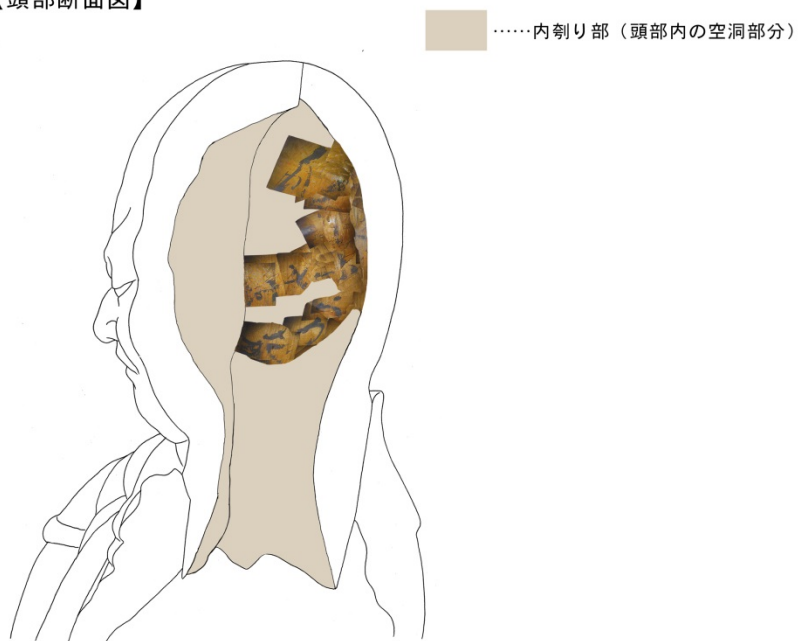


【略図制作：公益財団法人 静嘉堂】



参考略図：「亥神像」全身と墨書が発見された位置【制作：公益財団法人 美術院】

【頭部断面図】



参考略図：「亥神像」頭部断面図と墨書が発見された位置【制作：公益財団法人 美術院】

**【本作品の今後の展示予定】**

東京国立博物館でこの秋に開催される、興福寺中金堂再建記念特別展「運慶」展【会期：9月26日（火）～11月26日（日）】に出品いたします。

東京国立博物館所蔵の5軀とあわせ、42年ぶりに12軀が勢ぞろいする機会です。ぜひご覧ください。